

恋歌の表現2 「ぬ(寝)」

中川 正美

一 はじめに

前稿「恋歌の表現1『臥す』」では、「臥す」の表現をA就寝・B病臥・C横臥・D共臥し・E常時の五つに分類し、上代や三代集の「臥す」歌は、基本的には恋に関わって詠まれ、共臥しできない嘆きを表すものだとして述べた。(注1)万葉集の「臥す」「臥やす」を用いた恋歌は、A就寝の用法で、独り臥しの嘆きと、鹿や猪など知悉している動物が「臥す」さまを形象化し人間の恋心と関連づけて詠んでおり、平安時代の勅撰集では病臥や横臥した亡骸表現こそ認められないが、その大部分は万葉集と同じく恋にかかわって用いられていて、A就寝の「臥す」を用いて、独り臥しでの嘆きを、動植物の習性を象って恋の趣きを醸成して、片恋の苦悩を訴えている。物語や日記の作中歌でも独り臥しのつらさをさまざまに詠んでいるが、共臥しを詠むのは大和物語で実のない共臥しを嘆く三例だけで、韻文には情交を表すD共臥しは用いられないようだ。勅撰集でも拾遺集になって初めて一例みえるようになるのである。

韻文にD共臥しが認められない一方で、散文にはその共臥しが大和物語に一例、篁物語に一例、蜻蛉日記に三例、落窪物語では四〇例、うつほ物語では二〇例と多くなって、作中人物たちの関係を表すよう、要所要所で用いられている。(注2)

では、「臥す」と類義の、身体を横たえる意を基底にもつ「寝」はどうだろうか。

散文には、共寝の「寝」はさして認められない。古事記には二例みえるだけ、平安の物語でも、伊勢物語に三例、大和物語に二例と散見されるだけで、落窪物語の五例がすこしめだが、以降のうつほ物語や源氏物語ではまったく認められない。ところが、韻文では、共寝を表す「寝」は、古事記歌謡二〇例中一四例、万葉集二六五例中一〇一例、伊勢物語では九例中四例、大和物語では一四例中五例で、恋歌に限定すると割合はもともと高い。韻文と散文の関連を考えるうえで、まず、和歌の「寝」について、男女の契りに関わる恋歌の表現を中心に見ていきたい。

二 古事記

古事記には「寝」は、名詞「御寝」三例、「大御寝」一例、「昼寝」一例が散文に認められるが、いずれも漢語サ変動詞として用いられている。一方、動詞では興味深いことに、動詞「寝」単独の形と、生理的な睡眠をいう名詞「い(寝)」と横たわることをいう動詞「寝」(注3)で、横になって眠る意の「い寝」の形が認められる。「い寝」は歌謡に二例、散文に九例と両様に認められるが、対して、「寝」七例、「さ寝」五例、「率寝」四例、「隠み寝」「寄り寝」各一例は歌謡にだけ認められる。

(1) 天つ神御子、即ち寤め起きて、詔りたまひしく、「長くい寝(寝)」つるかも」とのりたまひき。(中一四五)(注4)

(2) 是に、其の伊須気余理比売の命の家、狹井河の上に在り。天皇、其の伊須気余理比売の許に幸行して、「宿御寝し坐しき。(中一五九)」
(1)は神武天皇が長く眠っていたなあと仰せになったというのだが、実

は、熊野の村で大きな熊の毒氣に当てられて意識朦朧となり、靈劍を献上されて正氣に戻った時のことばで、天皇の、危機とも思わなかった豪胆さが知られる。古事記では八俣の遠呂智も「是に飲み酔ひ留まり伏してい寝き」(上七一)と酔つ払つて眠り、忍齒王の二王子が敵対する男を「今は志毘、必ずい寝たらむ」(下三六一)ときつと眠りこけているから夜襲をかけようと相談するように、散文の「い寝」はすべて睡眠の意で用いられている。

漢語サ変動詞はどうか。(2)は神武天皇が太后とする乙女を求めて高佐士野に赴き、三輪の大物主を父とする伊須氣余理比売に求婚し、「仕へ奉らむ」と承諾されて、狹井河の畔の家に出かけ、「一宿御寝」なされたという。比売の家に向いて「一宿」眠つたというのだから共寝したのである。それは比売が参内した時、神武が「葦原の穢しき小屋に管疊 弥清敷きて 我が二人寝し(和賀布多理泥斯)(中一六〇・歌謡一九)と過往の記念すべき日を思い出し、改めて愛の歓びを謡ったことからも明らかである。しかし、垂仁天皇が后沙本毘売の膝枕で「御寝しましき」(中一九九)と記す「御寝す」は睡眠の意である。「昼寝す」も同じで、漢語サ変動詞は文脈によって語義が左右されるといえるよう。

では、歌謡にも認められる「い寝」はどうか。歌謡では「いを寝」の強調表現の尊敬形「いを寝(な)す」が二例みられる。

(3)八千矛の 神の命 (中略) 楮綱の 白き腕 沫雪の 若やる胸を

そ叩き 叩き愛がり 真玉手 玉手差し枕き 股長に いは寝さ

むを(伊波那佐牟遠) あやに な恋ひ聞こし 八千矛の 神の命

事の 語り言も 此をば (上八七・歌謡三)

八千矛神、つまり大国主命が辺境の越の国まで出向き、沼河北売の寝所の板戸を押したり引つ張ったりして妻問うたが、戸は開かれず朝の萌しの雉や鶏鳥の声が響きわたる。その時、内から沼河北売が応じたのが

(3)で、後にはあなたのものになりましようと思えるのだが、「楮綱の白き腕 沫雪の 若やる胸を そ叩き 叩き愛がり 真玉手 玉手差し枕き」と具体的な性愛動作で共寝をまことに官能的に描出し、結果として、「股長にいは寝さむ」、脚をのびのびと伸ばしてお休みになりましよう、情交後の満ち足りた寝姿を示して、男の心をいなそうとしている。辰巳正明氏は男女の愛の姿を示して、閨房における男女の営みの喜びの中に本当の愛があると示していると説かれた(注5)が、この謡も満ち足りた安らかな睡眠を示して歓びを謡い上げている。これは慣用的な表現であつたらしく、歌謡五番でも正妻の須勢理毘売が、嫉妬をなだめようとする大国主命の謡に応える仲直りの謡でも「沫雪の若やる胸を 楮綱の白き腕 そ叩き 叩き愛がり 真玉手 玉手差し枕き 股長にいをし寝(な)せ」(歌謡五)と、類句が使われており、「いを寝」は女性が夫に愛をもつて応じる際の表現なのであろう。ために散文に用いる「い寝」ではなく、歌謡にふさわしく「いは寝す」「いをし寝せ」と強調表現を採るのであろう。この二首のほかはすべて男の謡なのである。

(4)沖つ鳥 鴨著く島に 我が率寝(偉泥)し 妹は忘れじ 世の悉に

(上一三七・歌謡八・書紀歌謡五)

(5)ひさかたの (中略) さ渡る鵠 弱細 撓や腕を 枕かむとは 吾

はすれど さ寝(佐泥)むとは 吾は思へど 汝が着せる 襲の欄に

月立ちにけり (中二二九・歌謡二七)

(6)道の後 古波陀嬢子は 争はず 寝(泥)しくをしども 麗しみ思ふ

(中二六五・歌謡四六・書紀歌謡三八)

(4)は火遠理命が、海に帰った豊玉毘売が夫を忘れかねて献じた謡に、遙か彼方の異境の地で、私が誘つて一緒に寝たあなたのことは忘れまい、と想いを返している。こうした「率寝」は軽太子が軽大郎女に、募る情熱を「率寝(偉泥)てむ後は」(歌謡七九)と謡い、雄略天皇が若日下部王

に「確には率寝(偉泥)ず」(歌謡九〇)と求婚し、雄略天皇が童女赤猪子との七十数年を経た再会に「率寝(偉禰)てましもの」(歌謡九二)と残念がるように、男が女を誘って共寝する、男性主導の共寝を表している。

(5)は倭建命が尾張国の美夜受比売と契ろうと謡いかける。まず、天香具山を鳴きながら渡っていく白鳥の姿を呈示し、そこから鵠のようなか弱く細い比売の腕を描出して、そのしなやかな腕を枕にしたいと性交の姿態を謳い、続いて「さ寝む」と謡う。接頭語「さ」を冠して、そんなふうに寝たいと共寝を求めているのである。この場合は女の事情で不可能なのを惜しんでいるのだが。(6)は大雀太子、後の仁徳帝が、父応神帝に願ひ出て古波陀嬢子を賜ったときの喜びを「争はず寝しく」とこの人は父のものになるはずだったのに、私を拒むなんてせず、受け入れて共寝してくれた、いとしいことだと謡っている。

このように、「寝」が「共寝」を表す場合には、歌謡では連れて行つて横になる「率寝」、前提を挙げてそのように共寝する「さ寝」、「我が二人寝し」と誰とかを示したり、「争はず寝しく」「寄り寝て通れ」のように何らかの語が加えられており、散文でも「一宿御寝」と状況から共寝を示している。つまり、「寝」は通常は睡眠をいうのだが、男女の共寝をいう場合は、それにふさわしく言葉を付加すると考えられよう。

古事記の「寝」は、散文ではもっぱら睡眠の意で「い寝」が用いられ、韻文ではその「い寝」を女性はいを寝」と強調して、男性に満ち足りた情交後の睡眠を可能態として示し、男性をいなす。一方、男性の歌は情交しえた喜びを「寝」で謡うのが基本で、二例だけ、倭建命や雄略天皇が「さ寝む(泥牟)とは 吾は思へど 汝が 着せる 襲の裾に 月立ちにけり」(二七)、「率寝(偉禰)てましもの 老いにけるかも」(九二)と甘やかな共寝を希望し、それが不可能な状況を残念がっている。

古事記の「寝」を用いた恋の歌には、共寝で男女が結ばれ、愛を育む

のを人生で大切なことだとする想いが通底しており、結ばれた充足感、愛の歓びを謡うのが基本だといえよう。

三 万葉集

古事記歌謡では「寝」で愛の歓びを謡っていると述べたが、万葉集ではそうではない。愛の歓びを詠む歌はきわめて少ない。

(1)刈り薦の九重を敷きてさ寝れ(紗眼)ども君とし寝れ(宿)ば寒くもなし (万葉・一一・二五二〇)

(2)人言は夏野の草の繁くとも妹と我れとし携はり寝(宿)ば (万葉・一〇・一九八三)

(3)遠妻と手枕交へて寝(寐)たる夜は鶏がねな鳴き明けば明けぬとも (万葉・一〇・二〇二二)

(1)は、敷くのは刈り薦一枚だけ。そんな粗末な寝床で寝ていてもあなたと共寝していれば寒くなんてないわ、二人でこうしてるのが何より幸せよ、と女が男に甘えている。愛が全てにまさと単純にいうのはこの一首くらいで、(2)(3)は共寝できたと喜んでるが、「携はり寝ば」「明けば明けぬとも」の結句からは、人の噂なんて手を取り合って共寝した以上どうでもいい、知られたってかまうものかといひ、牽牛が一年待つてやつと織女と共寝できた夜なんだから、鶏よ朝だと鳴いてせき立てるな、明けてしまったってかまわないんだ、今、妻以外は眼に入らない、考えられないんだ、と開き直った激情が透けて見える。軽太子が「さ寝しき寝てば」(古事記歌謡七九)と謡ったような、一種自暴自棄的な情熱が看取される。鶏に鳴くなど詠むのは万葉集ではこの歌だけである。確かに、共寝したいは当人にとっては歓びである。しかし、これらはどうか。

(4)玉釧まき寝る(宿)妹もあらばこそ夜の長けくもうれしかるべき

(万葉・一二・二八六五)

(5) 人の寝る(所寐)うまいも寝ずて(味宿不寐)はしきやし君が目すらを
ほりし嘆かふ
(万葉・一一・二三六九)

(4) は手枕を交わして共寝する妻がいたなら長夜もうれしいのだろう
が、と詠むのだから現実にはいいわけ、主意は独り寝がわびしいと
嘆くことにある。(5)は、今この時、世の人は眠っているがそれは満ち足
りた「うまい」だ、だが私はそんな眠りなどできず、せめてあなたの目
を見るだけでも願っているが、それも叶いそうにないので嘆き続けて
いるんだと訴えている。世間の人とは違って自分だけ愛を得られない、
と取り残された嘆きをいう「人の寝るうまいも寝ず」の句は「人の寝る
うまいは寝ずや恋ひわたりなむ」(二九六三)など合わせて四首みえる。

似た語に「安い」があるが、「安い」は「物思はず安く寝る夜は」(三七
六〇)「まなかひにもとなかりて安いしなさぬ」(八〇二億良)「安い
も寝ずに恋ひ渡るかも」(三一五七)などと安心して眠る意、「うまい」
は共寝の満ち足りた甘い眠りの意で用いられている。これは、共寝の歎
びは他者のこと、でもわが身は、と他者と比較して嘆く型といえよう。
他者の共寝を想像して嘆く歌は、すこしひねって詠まれもする。

(6) 験なき恋をもするか夕されば人の手まきて寝らむ子ゆゑに

(万葉・一一・二五九九)

(7) 婚はずとも我は怨みじこの枕我と思ひてまきてさ寝ませ

(万葉・一一・二六二九)

(8) 我が背子をいづち行かめとさき竹のそがひに寝(宿)しく今し苦しも

(万葉・七・一四二二)

(6) は恋する人には既に相手がいて、夕方になると共寝していることだ
ろう、ちょうど今この時に。見込みのない恋なんだ、と自身に言い聞か
せながらも諦めきれない嘆きの歌である。それがさらに、夫が人に取ら

れたとなると「醜の醜手を さし交へて 寝らむ君ゆゑ」(三二七〇)と
口ぎたなく罵り、怒っている。(7)は疎遠な夫にまず、途絶えても恨みま
せんといつて、だから私の枕を贈ります、この枕を私と思つて頭を載せ
てお休み下さいといっている。遊仙窟が響いていると説かれてきたが、
相手は困ったであろう。(8)は同じ床で横たわっている、夫と竹を裂い
たように背中を向けあつて休んだ、うれしかるべき共寝の床でけんかを
したと亡くした後に後悔する挽歌である。夫は(三五七七番では妻)はど
こにもいかずに傍にいと安心していたからあんなことができた、
それはとんでもない勘違いだったのだと過往を悔やんで嘆いている。

したがって、独り寝を嘆く歌は多い。

(9) 軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝(独宿)なくに

(万葉・三・三九〇・紀皇女)

(10) うつせみの世やも二行く何すとか妹にあはずて我がひとり寝む(独
将宿)

(万葉・四・七三三・家持)

(9) は、鴨はつがいで眠るのに、私ときたら豪華な床に独りで眠ってい
る、と共寝できない身を嘆いている。紀皇女は腹違いの弓削皇子と恋仲
にあり、共寝の鴨の姿はつらさをいや増す景だったのだろう。(10)は旅先
での逢瀬を知られて噂になった妻坂上大嬢から後悔する歌を贈られて、
家持がそんなことはない、あなたに逢わずに独り寝なんかできようか、
あれでよかったのだと頼もしく応えた歌。万葉人にとって共寝があるべ
き生活で、独り寝は悲しく避けたいことだった、そのため独り寝は嘆き
の歌となるのである。

そこで、馴れぬ所で独り眠る「旅寝」の歌が現れる。

古事記歌謡に馴れぬ所で眠る旅寝の「寝」が認められるのは七五番で
「多遅比野に 寝(泥)むと知りせば 立薦も 持ちて来ましもの 寝
(泥)むと知りせば」と二例みえるが、これは古事記では履中天皇が墨江

中王の反乱で逃走中の謡とされ、この旅寝は危機的状況を表している。

しかし、万葉集の旅寝の歌は、むしろ独り寝の恋歌であることが多い。
 (11) 妹が袖別れし日より白妙の衣片敷き恋ひつつぞ寝る(寐留)

(万葉・一一・二六〇八)

(12) 山越しの風を時じみ寝る夜(寐夜)おちず家なる妹をかけて偲ひつ

(万葉・一・六・軍王)

(13) 海原に浮き寝(宇伎祢)せむ夜は沖つ風いたくなく吹きそ妹もあらなく
 に

(万葉・一五・三五九二)

(11)の男は旅にあるらしく、自分の衣だけを敷いて妻を恋い、淋しく眠りに就いている。(12)は讃岐安益郡への行幸に供奉した軍王が都を遠く離れて眠る夜が続く、そんな旅寝の夜はいつも都に残した妻を偲んでいると詠む、妻恋の歌である。「浮き寝」は、(13)で遣新羅使人が船中泊を余儀なくされた時、「鴨じもの浮き寝をすれば」(三六四九)と詠むように、水鳥が水上で眠ることを万葉人はつらいものと考え、そんな夜に、風にひどく吹かないでくれと頼んでいる。妻がいれば共寝で肌寒さなど感じないのに、今は独りだからと。これも旅の悲痛というより妻恋の歌である。そんな旅寝歌のなか、旅寝を喜ぶ歌がわずかに一首認められるが、これについては次章で述べる。

恋しさが募ると眠れなくなる。

(14) いにしへにありけむ人も我がごとか妹に恋ひつつい寝かてず(宿不勝)けむ

(万葉・四・四九七・人麻呂)

(15) 我妹子に恋ひすべながら夢に見むと我は思へどい寝らえなくに(不可寐)

(万葉・一一・二四一一)

(14)は人麻呂が妻恋で眠れないので、古人も私のようなのだろうかと想像しており、(15)は岩波文庫(二〇一四年一月)では第二句を「恋ひてすべなみ」と訓んでいるが、恋しくてたまらない意に変わりはない。せ

めて夢で姿を見ようと思うけれど、恋しさが募って眠れないという。「相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひて寝れど」(二五八九)と詠まれるように、愛していれば相手の夢に現れると考えていたらしい。恋する男は眠ってせめて相手の姿を見て心を慰めようと思ったのだろう。なのに眠れないのは、恋しさが募るあまりか、相手の心に確信をもてなかったのか。ここに「い寝」がみえるが、古事記歌謡では二例しか認められず、情交後の満ち足りた姿を想像する表現だと述べた。しかし、万葉集ではそうした用例は認められない。「い寝」は五二例も認められ、そのうち四四例が「いも寝ず」「い寝らえず」「い寝かつ」のように打消の形で不眠を表す表現となっている。(注6)

(16) ぬばたまの妹が黒髪こよひもか我がなき床になびけて寝(宿)らむ

(万葉・一一・二五六四)

(17) わたつみの沖つ玉藻のなびき寝(寐)むはや来ませ君待たば苦しも

(万葉・一二・三〇七九)

(16)(17)は待つ女である。いずれも女性が眠るために結っていた髪を解いて床に拡げる姿が浮き上がる歌で、(16)は夜離れを重ねている男が、髪をなびかせて横たわる女の姿を思い起こし、恋しく思っている。(17)は女がなまめかしい肢体を呈示して、男にはやく来てと誘っている。これらも独り寝である。万葉集では、独り寝をさらに「旅寝」「浮き寝」「不眠」などの視点から細分し型として詠んでいるといえよう。

語句ではどうか。古事記では男女の共寝は歌謡で「さ寝・率寝」「寄り寝」「隠れ寝」などの動詞や「我が二人」と誰との共寝か、主体や客体を示したり、「争はず」の動作行為を詠み加えて共寝を表していた。

万葉集では古事記歌謡と同じく、「妹とし寝ねば」「二人わが寝し」のように共寝の主体や客体を詠み込み、「さ寝・率寝・い寝・寄り寝」を用いているが、それだけではなく、「入りて寝」「なびき寝」「まきて

「寝る」のように具体的な動作に「寝」を続けて共寝を表したり、「思ひつつ」「恋ひわびて」「思ひ乱れて」の心理状態に「寝」を続けて独り寝を表している。このように、万葉集で「寝」を用いた恋歌は、共寝の歎びを謡う古事記歌謡とは違って、片恋の嘆き、独り寝の苦しみを詠むことに主点が移っているといえよう。

四 古今集

古今集には「寝」が掛詞「うきね」一例を含めて四八例認められる。その特徴は万葉集と同じ項目でも異なる表現が生じていることである。

「旅寝」は、万葉集では従駕や君命などの仕事で家を離れて、野辺や船上で眠りに就いているが、慣れない土地や危うい船での眠りに、故地を思い、残してきた妻を思つて嘆く歌であった。ところが、古今集になると、旅寝が遊樂となり、幻想的な景を現出している。

イ春の野にすみれ摘みにと来し我そ野をなつかしみ一夜寝(宿)にける

(万葉・八・一四二四・赤人)

(1)この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家路忘れて

(古今・春下・七二)

(2)宿りして春の山辺に寝たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

(古今・春下・一一七・貫之)

イは「旅寝」の歌でも、「野をなつかしみ」と万葉集では珍しく、すみれ咲く野が慕わしくてつい泊まってしまった、摘んで直ぐ帰ろうと思っていたのに、と自然に触れた喜びを詠んでいる。しかし、古今集では異なる。(1)ではこの里に泊まってしまっただけ、なぜなら桜がしきりに散つて帰り道がわからなくなつてしまったからというのだが、花びらが風につて前後左右に舞い散る姿が視界いっぱいに拡がる、とはまことに幻想的な美しさである。「散りのまがひ」から落花が道を遮るとの解

が多いが、片桐洋一氏はそれだけではなく、「忘れて」から桜が散るのに気を取られたという精神的な面も含まれると説かれた。(注7)とすれば、現実の視覚も感覚も閉ざされた花びらだけの別世界となる。さらに、(2)で貫之はこうした落花の美を「夢のうちにも花ぞ散りける」と、山寺に参籠した夜、昼に感動した桜の散る姿が夢の中でもそのままに散り続けていると、泊まるのが先で、昼間の感動の興奮がそのまま夜にも続いていると詠む。高田祐彦氏が「昼と夜、現実と夢との区別が失われたような幻想的な世界」と説かれた(注8)ように、夢の中の景に昼間の景が二重写しとなつて迫ってくる。イの万葉歌では赤人の楽しい記憶として詠まれているが、古今集では自然を落花の美として切り取り、幻想的な景として呈示、鑑賞しているのである。

(3)花に飽かでなに帰るらむ女郎花多かる野辺に寝なましものを

(古今・秋上・二三八・平貞文)

(4)かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに寝て明かすらむ人さへぞうき

(古今・秋上・一九〇・躬恒)

(3)(4)は秋で、集団である。(3)は蔵人所の役人が嵯峨野に花を見に繰り出して帰ろうとした時に、貞文がどうして皆さんはお帰りになるのですか、まだ花に飽き足りませんのに、女郎花がたくさん咲いているこの野辺に泊まりたいものですのに、と女郎花を女性に見立てて、揶揄し、笑わせ、引き留めている。(4)は神鳴の壺で秋の夜を惜しむ歌会を催した際に、呼ばれた躬恒が、歌会のテーマそのままに今夜はほんとに惜しむべきすばらしい夜で明けて行くのが惜しいのですが、さらに惜しいやなのはこのすばらしさが分からず、今この時、むなしく寝ている人ですよと、参席した人々を秋の夜の情趣を知る方々だと称揚する、いかにも専門歌人という作である。この(1)～(4)からは、平安貴族が近郊に逍遙して自然に触れ、秋の夜を愛でるのが生活文化となつていると知られ、その

ため、旅寝のつらさ、妻恋が詠まれにくくなったのだろう。

「独り寝」を詠む恋歌は、共寝できずに独り眠る夜が、恋する者にとつてどれほど眠れないか、絶えがたくつらいかとさまざまに詠まれるのだが、そのなかに動物を詠み込む型がある。

口妹を思ひいの寝(伊能年)らえぬに秋の野にさ雄鹿鳴きつ妻思ひかねて
(万葉・一五・三六七八)

(5) 秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我劣らめや独り寝る夜は

(古今・恋二・五八二)

(6) 秋萩も色づきぬればきりぎりす我が寝ぬごとや夜は悲しき

(古今・秋上・一九八)

万葉集では恋の独り寝に鹿や鶴、千鳥や鴛鴦の鳴き声が響いて眠れないと詠むのがもっぱらだが、ロの歌では、遣新羅使人が、眠れぬ耳に響く妻問いの鹿の声に、鹿は私と同じだ、共寝できないのだなど共感している。それが古今集になると、(5)のように鹿と自身の想いを対置して恋の重さを比べ、私の方がもっともつとつらいのだと嘆き、(6)ではそれを妻問いに聞わらない今のコオロギにまで拡張している。万葉集には今のキリギリスが見えるが「こほろぎの我が床の隔に鳴きつつもとな 起き居つつ君に恋ふるに寝かてなくに」(二三二〇)と不眠を詠んでも、やたらに鳴いてうるさいものとして詠まれている。ただ、(6)の「悲し」は恋のものの思いとはそぐわないようで、秋の悲愁に引きずられた感もある。

「独り寝」の待つ女では、

ははしきやし吹かぬ風ゆゑ玉櫛笥開けてさ寝(左宿)にし我ぞ悔しき

(万葉・一一・二六七八)

(7) 君や来む我やゆかむのいさよひに槇の板戸もささず寝にけり

(古今・恋四・六九〇)

(8) 月夜には来ぬ人待たるかきくもり雨も降らなむわびつつも寝む

(古今・恋五・七七五)

前章(16)(17)の万葉歌では魅力的な女の肢体を示して男の心を誘う歌だったが、このハでは風を男に喩えて、男を待って戸を開けておいたのに、「吹かぬ風」、訪れない男だったので、そのまま寝てしまった、あんな男を信じて待った自分が悔しいといっている。一方、(7)(8)の古今歌にはどこかあきらめが漂っている。(7)ではまだ男に期待を持っていた、夜離れがちの男が来てくれるのをこのまま待っていようか、それとも私の方から逢いに行こうかとためらっているうちに十六夜の月が出て、門を閉ざさずに眠ってしまったんだわと自身に納得させ、(8)では、今日は逢瀬が期待される月夜だから来ないと分かっている人でも待ってしまう。この空がすっかり曇って雨でも降ってほしい。それならこの雨では来られないわとつらく思いながらも眠れるのに、と心を残しつつも恋の終わりを受け入れようとしている。

「浮き寝」は、万葉集では水鳥の眠りや船中で泊まる旅寝として詠まれることが多い。

二しきたへの枕ゆくくる涙にそ浮き寝(浮宿)をしける恋の繁きに

(万葉・四・五〇七・駿河采女)

(9) 涙川枕流るるうき寝には夢もさだかに見えずぞありける

(古今・恋一・五二七)

二は万葉歌でもめずらしい詠み方で、涙が溢れて川となると詠む。私の涙が頬を濡らし枕を伝って流れ落ち、川となる、それはもう水鳥が浮いて眠ることができる程の水かさなので、私は水鳥のように浮き寝をしました、それほど私の恋する想いははなはだしいのですと訴えるのだが、(9)の古今集では、涙は枕を伝うだけではない。その枕まで流れてしまう景を描出し、そこに「夢」を持つてくる。夢ならあえるのに、夢をみるための枕が流れてしまうからそれすらできないと嘆く。万葉集の枕は「敷

妙の枕動きて夜も寝じ」(二五一五)とも思いで展転反側するので枕が動いて眠れないと詠むが、この古今歌ではその枕がなくなるといふ。また、伊勢は「知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名の空に立つらむ」(六七六)と枕は恋の秘密を知る物とし、それを避けて使わず共寝したのに、噂が立ったと悔やんでいる。

さらに、古今集には新たに「常時」の用法が加わる。

(10) つれもなき人をやねたく白露の置くとは嘆き寝とはしのばむ

(古今・恋一・四八六)

(11) わりなくも寝てもさめても恋しき心をいづちやらば忘れむ

(古今・恋二・五七〇)

(10)は「置く」と「起く」を掛けて、「起く」と「寝」を対句としており、(11)では「寝ても覚めても」と対句で、四六時中、恋の嘆きに囚われていると詠んでいる。

このように古今集も万葉集と同じく「寝」は恋の喜びではなく、恋の苦しみや嘆きを詠んでいるのだが、「常時」など新しい用法、生活文化の変化による新たな自然の見方が生じ、古今歌では、万葉歌でも珍しい詠み方に、さらに工夫を凝らして新たな世界を創造しているといえよう。

四 「寝」と「臥す」

では、「寝」は「臥す」とどういうふう違うのか。

表は、前稿の「臥す」表と比較できるように、「寝」に「睡眠」「共寝」を立て、「睡眠」の下位項目として「独り寝」「旅寝」などを立てた。(注9)「睡眠」の数値は下位項目の数値を除いた数である。

こうしてみると、「寝」は「臥す」の六、七倍認められ、項目も、万葉集以降ほぼ踏襲されている。古事記と万葉集では共寝の歌が多く、勅撰集では、三代集は「独り寝」の割合が二二～二四%と多く、後拾遺集

は「共寝」が若干多い。そして、「独り寝」と「不眠」を合わせると、いずれの集も「共寝」より多いことが注目される。

表 和歌の「寝」「臥す」表現

	寝										臥す									
	睡眠	うたた寝	寝覚め	独り寝	旅寝	うき寝	不眠	非眠	共寝	常時	就寝	独り臥し	動物植物	病臥	横臥	亡骸	悲嘆	思案煩悶	共臥し	常時
古事記	3				3				14				1							
万葉集	19		3	67	16	8	51		101			2	9	4	1	8	6			1
古今集	5	1	2	13	6	2	6		9	4	1				1					2
後撰集	3	2	3	10	5	3	7	3	7	2	2	3						1		
拾遺集	4	2	6	14	3	1	9	4	13	1	2	1	1	1	2				1	
後拾遺集	10	2	9	6	3	1	6	3	8		2		6						1	

興味深いのは、「共臥し」は後撰集まで認められないのに、「共寝」は、それが共寝し得ない嘆きであつても、古事記以降用いられ続けていることである。

「寝」と「臥す」が同時に用いられている歌をみてみよう。

(1) むし衾なごやが下に臥せれども(雖臥) 妹とし寝ねば(不宿者) 肌し寒しも (万葉・四・五二四・藤原麻呂)

(2) 手も触れで月日経にける白真弓おきふし夜はいこそ寝られね (古今・恋二・六〇五・貫之)

(3) いづこにも身をば離れぬ影しあれば臥す床ごとに独りやは寝る (後撰・雑三・一二二八・真延法師)

「寝」「臥す」両語が一首のなかに用いられている場合、「臥して寝る」夢路(後撰六二〇・紀長谷雄)「現には臥せど寝られず」(後撰九二五)のように「臥す」が先で「寝」が後に詠まれる。(1)は麻呂が柔らかな寝具に横たわつてもあなたとの共寝でないから肌寒いと大伴坂上郎女に訴え、(2)は女性を弓に喩え、弓の縁語「伏し」と「臥し」、「射る」と名詞「い」を掛けて、いつもあなたのことを思っているのに共寝できないと嘆いている。(3)は女友だから妻がいないから「独り臥し」ばかりねとからかわれた法師が、私には影があるので、「臥す床」がどこでも独りでなんか寝ましょうか、影と共寝ですよ、と切り返している。からかいの「独り臥し」をまず「臥し」を使って、「臥す」ための「床」を出し、つぎに「臥し」を「寝」に変えて「独り寝」と洒落たのだろう。

(4) 恋しきを慰めかねて菅原や伏見に來ても寝られざりけり (拾遺・恋五・九三八・重之)

(5) 鹿の音ぞ寝覚めの床に通ふなる小野の草臥し露や置くらむ (後拾遺・二九一・秋上・家経)

(6) 秋の田のかりそめ臥しもしてけるがいたづらい寝を何に積ままし

(7) かりそめに君がふし見し常夏のねもかれにしをいかで咲きけむ (後撰・恋四・八四五)

(大和物語・一〇八・三三四)

(4)は「伏見」と「臥し」の掛詞で、伏見に來たら眠れると思つたのに恋しさが募つて眠れないと嘆き、(5)は「寝」が先だが、「寝覚め」るのは詠み手、「草臥し」は鹿だから主体が違っている。(6)は、女を訪れても部屋に入れてもらえず、女の気持ちと和むのを待ったが、それもむなし、簀子で「臥し明かし」た翌朝詠み入れた歌で、「秋」に「飽き」、「刈り」に「仮」、「い寝」に「稲」を掛けて、稲を刈り取つて稲木に架ける秋の景を描出し、あなたに飽きられて「かりそめ臥し」のつもりでしたが、結局「いたづらい寝」、むなし独り寝になつてしまいましたと怨んで、こんな夜を積み重ねたくないと訴えている。

作中歌も同じ傾向で、(7)の大和物語では常夏の花が咲いたなんて不思議です。「常夏」に「床」、「根」に「寝」、「枯れ」に「離れ」を掛けて、あなたがいい加減な気持ちで「臥し」た、その床には「寝離れ」してすっかりご無沙汰、根が枯れてるのにどうして花が咲いたんでしょうね、そんなはずなのに、と皮肉を言っている。

このように、一首のうちに「寝」と「臥す」を用いる場合は、「臥す」は横たわる動作、「寝」は眠る行為の意で用いられ、「臥す」が先、「寝」がその結果として表現されている。

和歌では「共臥し」の「臥す」はほとんど用いられず、「共寝」の「寝」が多用され、散文では「共寝」の「寝」はまれにしか用いられないが、「共臥し」の「臥す」は落窪物語やうつほ物語で多用されている、という逆転現象が認められる。類義であつた「臥す」は動作性を強め、「寝」は行為性を強めていったと思われ、物語では、「臥す」を情交に至る動作として象徴的に用いることを、いわば発見したと思われる。一方で、

「ぬ」は直截的にすぎると避けられたのではないか。対して韻文では、「寝」は古事記歌謡は共寝しえた歎びを謡うが、万葉集以降はむしろ共寝できない嘆きを、寝覚めや独り寝、旅寝、浮き寝、不眠など、視点を変えた多様な表現が生じて多用されたのだろう。

注

〈1〉拙論。「梅花女子大学文化表現学部紀要」第一八号、二〇二二年三月。

〈2〉『『臥す』の文学史―源氏物語以前―』（「梅花女子大学文化表現学部紀要」第一六号、二〇一九年三月）、『『臥す』人々―日常の文学的形象―』（「梅花女子大学文化表現学部紀要」第一七号、二〇二〇年三月）

〈3〉岩波古語辞典（岩波書店、一九七四年十二月）。

〈4〉古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集は新編国歌大観、その他は新編日本古典文学全集を用いた。引用文も同じ。私に表記などを変えたところがある。引用文には括弧中に、作品名・巻名や段数・頁数などを示した。

〈5〉『古事記歌謡注釈』（新典社、二〇一四年三月）

〈6〉打消でない八例には前後に否定の句がある。共寝も三例ある。もちろんすべてが恋歌ではない。過往を恋う「いも寝らえず」もある。

〈7〉片桐洋一郎氏『古今和歌集』（笠間書院、二〇〇五年九月）

〈8〉高田祐彦氏『新版古今和歌集』（角川書店、二〇〇九年六月）

〈9〉一首に複数の項目の「寝」もあるので歌数を表しているのではない。「うまい」「安い」「丸寝」「朝寝髪」「寝処」などの名詞は含めていない。「憂き寝」「ねぬなは」の掛詞は含めている。